

の mass は、一部に石灰化を伴い不均一に enhance される solid な部分と、enhance 効果のない cystic な部分よりなっており、その周囲には広汎な浮腫を伴っていた。脳血管撮影では動脈相早期から腫瘍血管が造影され、毛細血管相から静脈相にかけて tumor stain が認められた。

MRI では腫瘍本体と考えられる solid な部分は T₁ 強調画像でやや low signal intensity, T₂ 強調画像で mixed signal intensity を呈し、Gd-DTPA により著明に enhance された。腫瘍摘出術を施行したところ、組織所見は neurinoma であった。患者は現在外来にて経過観察中である。

B-18) 腫瘍外出血で発症した hemangiopericytic meningioma の 1 例

泉 直人・福田 博 (旭川医科大学)
 代田 剛・田中 達也 (脳神経外科)
 米増 祐吉・苦米地正之
 村岡 俊二 (同 第一病理)

Hemangiopericytic meningioma (WHO 分類) は、髄膜腫の中では稀であるが、臨床的には局所の再発が多く、また、遠隔転移があるなど、通常の髄膜腫とは異なった biological behavior をとる。そのため組織学的診断と治療が問題となる。今回我々は、腫瘍外出血にて発症した hemangiopericytic meningioma の一例を経験した。

症例は27歳女性。1989年3月、突然の頭痛で発症。某医の CT scan で脳内出血を伴う左後頭葉腫瘍を指摘され、当科に紹介された。4月3日、腫瘍摘出術施行。腫瘍は hemangiopericytic meningioma であった。この腫瘍の診断と治療につき文献的考察を含めて報告する。

B-19) 小児側脳室三角部髄膜腫の 1 例

池田 正人・石倉 彰 (国立金沢病院)
 大日坊千春 (脳神経外科)

症例は14才女児。89年2月16日に、けいれん発作をおこし近医に搬送された。CT scan, MRI にて左側脳室三角部の腫瘍を疑われ、同日当科に紹介入院した。入院時神経学的には、視野異常もなく、他にも特に異常は認められなかった。CT scan では左側脳室三角部に軽度高吸収域の腫瘍を認め、造影剤で均一に enhance された。脳血管撮影では、前脈絡動脈、外側後脈絡動脈が拡大し、腫瘍への流入を認め、腫瘍陰影も認められた。3月1日左側頭開頭、中側頭回切開にて腫瘍を全摘した。病理組織学的には meningothelial meningioma であ

た。術後一度全身性けいれん発作が出現したが、明らかな視野異常も認めず、そのほかの神経学的異常も認めずに退院した。小児の髄膜腫は成人に比して脳室系に発生することが多いとされているが、髄膜腫自体が比較的稀であり、症例報告する。

B-20) 急速な成長過程を CT にて確認できた 髄膜腫の 1 例

関谷 徹治・岩淵 隆 (弘前大学)
 岡部 慎一 (脳神経外科)

髄膜腫の術後の再発に関しては、これまで多くの報告がなされているが、その成長過程を、その当初から CT にて捉えた報告は少ない。我々は右蝶形骨縁髄膜腫の患者で、それ以前にたまたま撮影していた CT を入手、比較検討することができ、その成長過程の一端を確認することができたので報告する。症例は67才、女性。昭和62年9月7日頭痛のため某病院を受診、CT にて脳腫瘍を指摘され当科を紹介された。既往歴から昭和59年3月1日にも、CT 検査を受けていることが分かり、これを検討したが、この時点では腫瘍は全く存在していなかった。このことから腫瘍の成長速度 (tumor doubling time, Td) を、CT 上で求めた体積から計算し、Td=154.4日と算出された。これらのことは、一般には老人の髄膜腫は incidental に発見されることが多く、その成長も遅いと考えられているが、中には急速に成長する例もあることを示唆しており、臨床上注意すべきものと考えられた。

B-21) 乳幼児中枢神経疾患と脳循環代謝

白根 礼造・佐藤 慎哉 (東北大学脳研)
 亀山 元信・小川 彰 (脳神経外科)
 吉本 高志

伊藤 正敏 (東北大学サイ
 クロトロン RI
 センター)

小児脳は良好な可塑性を有する事が知られている。小児中枢神経疾患の機能予後と脳循環代謝の関係を検討する事により、小児脳の特長性を明らかにすると共に、治療方針の決定をよりの確にできるものと期待し以下の検討をおこなった。対象：5カ月～3才の水頭症3例、狭頭症3例、硬膜下血腫2例、深部静脈閉塞症1例、小頭症1例に対し、ポジトロン CT 及び ¹²³IMP SPECT による脳循環及び酸素代謝を測定し、臨床経過と比較検討した。結果：発達が正常であった舟状頭蓋と短頭蓋の2症例を除く8例で脳循環代謝の異常が認められた。術